「子育て広場」の機能に関する一考察

加　藤　寿　子

はじめに

現在の少子化問題や子育て困難状況に伴い、子育て支援に対する社会的関心が高まる一方で、子育てを行う母親たちは、自身にとって最適な支援は何かを毎日模索しながら様々な支援活動を活用している。これまで地域の子育て家庭を対象とした「子育て広場」を開催する中で筆者は、「母親や子どもにとっての支援とは何か」を実践から検討を重ねた。この中でそれぞれの母親たちが抱えている問題は、内容も質も異なり多様であるが、解決困難な問題ばかりではなかった。その多くは、問題の積み重ねによって問題が複雑化し、さらに不安を拡大している状態であった。また、そうした母親らは、その解決方法が分からないまま、次の問題に直面し、絶えず新たな問題を抱え不安を持つ状態である。これまでの先行研究には身近な人との関係を持つことの必要性が唱えられてきたが、核家族化した現在の子育て家庭では、家族関係そのものが希薄となり養育力が低下している。また、地域の人間関係が日常的にあった時代とは異なり、人とのつながりは希薄となってきている。つまり、家庭で育てる力が低下してきたことは、家庭内だけの問題ではなく、地域においても子どもを育てる力が低下し、困難な状態になりつつあると考えられる。

これまでの「子育て広場」の実践から、こうした母親と子どもに対する支援には、「母親と子ども」「母親と他者」「母親と母親自身」をつなぐ場が必要としており、母親に焦点を当てた支援によって、さらに「母親が母親として育つ」場となることが重要であると考えた。そのためには、母親として子どもを見つめ、他者とのかかわりから他者を知り、母親が自身を見つめ自己を知ることが、母親の子育てに関する問題解決に導く力を育成することになると考えた。そこで、子育て広場の機能として母親と子ども・他者・母親自身をつなぐ活動が、母親にどのような変化をもたらし、子どもの理解にどのような影響があるのかを明らかにする。これにより、子育て家庭における子育て支援の在り方の可能性を見出したいと考えている。

1．子育て支援に関する先行研究

子を産み育てる過程は、現代の父親・母親だけが支援を必要としている特殊な行為ではなく、どの時代においても社会状況の変化や子育て環境問題がある中で、子どもは確実に育てられ生きてきた。落合（1994）は、21 世紀の家族の在り方を捉えなおし、特に母親としての女性の在り方や生き方の変動を整理し明確にした。[1] 子どもを取り巻く環境が変化したことは、子どもだけが変化したのではなく、家族そのものが変化し、特に母親の生き方さえも変化し続けている状態である。そのため、子どもや子育てに対する意識の変動のなかで、現在の子育て家庭には、何が不足し何を必要としているのかを常に収集することは、これからの子育て支援を考える上で不可欠となる。すなわち子育て家庭の現状や父親・母親の置かれている状況を明らかにすることであると考えられる。

母親の子育て時に起こる育児不安について牧野（1982）は、育児不安尺度を用いて調査し、育児不安の要因として「一つに夫婦関係であり、他の一つは母親の社会的な人間関係のあり方である。」[2] としている。また岩田（1995）は、母親の不安とソーシャルネットワークの関係を調査し、育児不安の要因として「ソーシャルネットワーク・他児比較・夫に対する評価・家族構成」を挙げた[3]。大日向（2002）の研究では、母親の切実な声を読み取り、育児不安の現状を捉えている[4]。また鯨岡（2002）は、関係発達の観点から親と子の関係発達を考え、育てるものと育てられるものの関係によって発達する過程を解き、相互関係の重要性を明らかにしている[5]。荒牧・無藤（2008）は、育児不安や育児ストレスなどの否定的感情について触れ、育児への感情は「負担感」「育て方／育ちへの不安感」「肯定感」により構成されていることを明らかにした[6]。このような母親の育児不安に即して、母親のニーズにあわせた地域の子育て支援活動も変化してきた。こうした子育てに行き詰った母親は特殊なケースではなく、貧困化が急速に進み、社会の歪みが母親や子どもへ深い影響を及ぼしていることが現状である。また、母親の子育てに対する負担感や不安感が要因となり虐待的行為へつながるケースも増加している。厚生労働省の調査によると平成24年度虐待相談件数は6万6807件となった。こうした虐待に関する調査の中で中谷・中谷（2006）によれば、虐待的行為に及ぼす影響として母親の被害的認知が関連していることも明らかにされている[7]。こうしたさまざまな子育て環境におかれている母親へ支援を行うことは、どのような影響を及ぼすのか、支援の機能には何が必要とされているのかについて、明確にしていくことが必要である。

2．本研究の意義と目的

これまでの子育て支援活動においては、母親の置かれている状況を把握し、そのニーズに合わせる支援が検討されてきた。大豆生田（2006）によると、これまでの子育て支援の機能における実態として、「特に親子同士をつないだり、あるいは他機関などと連携をとりながら親子の支援をしていくような体制としては大きな課題がある」[8] と指摘している。さまざまな支援活動に参加する母親らにとって、今なお子育てに負担感や不安感を持つという結果から、母親のニーズに応えるばかりで、支援方法に何らかの不足があるのではないかと考えられる。

このことから子育て支援には、母親や子育て家庭のニーズに対応した支援方法と合わせて、別の側面から母親や子育て家庭を支えることが重要と考える。それは、「母親と子ども」「母親と他者」「母親と母親自身」をつなぐ支援方法であり、中でも子どもや母親・他者と親密に触れ合うといった直接的な支援ではなく、母親は「子ども」「他者」「自己」を知ることが、真に子どもや他者・自己とをつなぐことになると仮定した。そこで、母親が「話す」「聞く」ことにより、母親が自ら考え、子ども・他者・自己について改めて向き合う場とした。さらには、こうした体験の積み重ねにより、母親が母親として育つことが予想され、その後の子育てにおいて多様に影響を与えていくと考えたのである。母親が母親として育つこととは、母親が負担感や不安感を持つことを問題としているのではなく、子育て困難な状況であっても母親が子どもや子育てについて気づき、さまざまな解決方法の中から自ら判断する力を育てることである。

本研究では、このつなぐ支援方法を実践することにより、母親の気付きや思いの変化を捉え、母親が子ども・他者・自己をどのように見つめ、さらに子ども理解にどのような変化を

もたらすのかを検討する。これにより、子育て中の母親にとって必要な子育て支援活動の機能の在り方を明らかにすることを目的とする。

3．研究方法

3．1．調査対象

本研究では、「子育て広場」に参加した母親 18 名（定員 20 名を募集し、18 名が参加した）を対象とし調査を行う。参加者の年齢は、20 代 0 名・30 代 17 名・40 代 1 名であり、平均 35 歳であった。子どもの人数については、一人 14 名・二人 2 名・三人 2 名であった。「子育て広場」の活動内容は、母親同士が 1 つのテーマをもとに話し合い、子どもたちは母親の見える同じホールで遊ぶ形態である。このテーマが話し合いの「きっかけ」となり、母親同士がテーブルを囲み井戸端会議のように話し合うことで、つながりを持っていく内容である。ここで話し合う母親たちは、年齢も育児経験も異なる母親たちである。

3．2．調査時期

調査は、「子育て広場」開催期間である平成 25 年 5 月から平成 26 年 2 月に行われた。毎月一回（10：40 ～ 12：00）計 10 回の開催である。この中から、4 回の話し合いに注目し、検討を行う。

3．3．調査方法

本研究では、母親同士の話し合いを記録した調査（参与観察法）である。これは、子育てにおける母親の育児感情や子ども理解の変化を読み取ることにより、母親の変化を検討したいと考えた。母親の思いの全てを読み取ることは困難であり、また母親が置かれている立場や育児状態・家庭環境によっても変化していることは明らかである。しかし、この子育て支援活動の場において、現在必要とされている支援とは何かを、母親が語る言葉を拾い集める作業から導きたい。さらには、母親の育児経験や生活暦・生育暦により、子どもや子育てに関する考え方や見方には個人差があるが、さまざまな母親たちの接触により、どのような変容があるのかを見つめながら調査を進めたいと考えた。

「子育て広場」に参加した母親たちは、2 つのテーブルに分かれて着席し、各 10 名以内の母親集団の話し合いとなっている。（その回の参加人数によって、母親集団の人数も変動する。）この話し合いのメンバー構成には、特別な操作はなく、母親の座る位置は自由選択とした。その際に、初めて出会う母親だけでは、話の展開ができない場合もあることを考慮し、話し合いの「テーマ」を筆者が提案する。この「テーマ」は、その時期や季節に応じた事柄や日常的に関心のある事柄から選択している。また話し合いは、母親らから沸き起こった疑問や質問へ展開されていくこともあり、「話す」意欲を維持するために母親らに任せている。したがって、子育て中の母親であることのみが共通であり、母親集団のメンバーや母親の育児暦・人柄によっても、話し合いは様々に展開される。このとき、子どもは母親と同じホールで遊び、母親と遊び場を行き来できる状態である。母親自身の思いを「話す」ことと他者の思いを「聞く」ことに重点を置き、母親たちの言葉や態度を観察し、記録する。この話し合いによって母親の思いが、映し出された場面を抜き出し検討する。この観察記録により母親自身の変化や母親同士のかかわり方を検討し、これにより母親の子ども理解がどのように変化するのかについて明らかにする。

4．研究結果と考察

4．1．母親の話し合い①

テーマ「最近出かけたところ・子どもの頃に行ったところ・これから行きたいところはどこですか？」

子育て広場の初回となったこの日は、子どもたちが緊張しているばかりではなく、母親たちも緊張した状態である。そこで、話し合いのテーマには、誰もが話しやすく、初めて出会う母親同士であっても関心を引き、日常の様子が伺えるテーマを提示した。単に自己紹介を行うと、他者に具体的な話を伝えたくないという意識を持つことも考えられ、ゆったりとした雰囲気となるように心がけた。これまでには、母親らが行ったことのある場所や今後行ってみたい場所についてよく話がされており、現在の場所から離れたいという要求を持つことが見られたので、これをテーマとした。

（Mさん）今までいろいろ出かけたけれど、子どもと出かけると、子どもをおもてなししなければならない感じがする。①だから家族とは行きたくない。たいへんだもの。大人と子どもが喜ぶところが違うから。

（Hさん）私が、子どもの頃に行ったところで良かったのは、動物に触れてよかったから、子どもにもそうなって欲しいなと。②子どもの頃の記憶があまりないけれど、よく山に行ったことは覚えている。ハワイや沖縄にも行ってみたい。チャレンジャーだけど、子どもには自然に触れさせてあげたい。

（Ｉさん）今、妊娠５ヶ月。これから大変になるので、生まれる前に行っておきたいなと思う。

（mさん）この間、動物園に行って、刺激になったみたい。もっと動物を見せてあげたい。②動物を自分が好きだから、将来犬を飼いたいし・・。最近、子どもが遊べる場所が減ってきたなと感じている。

（Nさん）子どもの頃に、川に行ったのを思い出した。今１歳１ヶ月で、この間ディズニーランドに行って、大変だったけれど行ってよかった。①でも、この子にとっては、公園のほうがいいと思った。③

【考察】

初めて出会う人の中で自らの思いを伝える行為は、誰もが即座に話せるものではなく、ためらい戸惑いながら話すものであり、母親の話す内容にも個人差がある。一つのグループが６～７名の小集団の中であっても、初回はテーマに沿って一言二言話すのがやっとといった印象であり、言葉は短くとも一人ひとりの話にはかなりの時間が経過した。この状態では、母親同士の会話が交じり合うところまでは到達していない。また、全ての母親が他者の話に集中できるとは限らず、隣の母親と話し続ける母親や、子どもの姿ばかりを目で追っている母親もいる。そのため母親らの関係には、全体的に緊張感や不安感が見られ、落ち着いて話し合う状態はなかった。このことから、自由に話す場を提供したとしても、初対面である母親同士の話し合いには、スムーズに母親同士の関係が形成されるわけではないことがわかる。今回、誰もが話せるテーマを準備したが、関係性のない母親同士が関係を組み立てていくため、初回の話し合いは一方向的であり、話し合いの内容に深まりは見られなかった。

しかし、話し合いの内容を読み解くと、一人ひとりの母親は、さまざまな子どもの見方をしていることが分かった。①「子どもと出かけると、子どもをおもてなししなければならな

い感じがする。」「大変だったけれど行ってよかった。」のように子育てに対する負担感を感じている母親もいれば、②「動物に触れてよかったから、子どもにもそうなって欲しいなと。」「もっと動物を見せてあげたい。」のように子育てに対する意欲や期待感をもつ母親など、子どもや子育てに対する見方の違いが感じられるものであった。さらに③「この子にとっては、公園のほうがいいと思った。」では、実際に子どもとかかわる中で、子どもにとって最も適したことは何かを母親なりに捉えている姿も見られ、「話す」行為によって母親自身が子どもについて気付く一場面となっていることが推察された。これらにより、初回では、母親同士が深く関係性を持つところまでは達していないが、他者の思いを「聞く」行為が、それぞれの母親の意識に触れ、揺らぐ作用をもたらしていると考える。

4．2．母親の話し合い②

テーマ　「好きなものや興味のあるものは何ですか？～雑誌の切抜きを活用して～」

さまざまなジャンルの雑誌 30 冊以上用意し、雑誌の中から母親が興味・関心のあるものを切り抜き、八つ切り画用紙に貼る作業を 15 分程行った。母親自身が、現在何に興味があるのかを言葉で説明する前に、考えていることに近いものを具現化することにより、曖昧なイメージからより明確にする作業が必要であると考えた。また、関係性が組み立てられていない母親同士の中で、母親自身の思いが話しやすくなることを想定し、話しやすくなる仕組みとして雑誌の切抜きを提示した。これを元に、母親が現在の自己を振り返り、好きなものや興味のあるものについて次のように語った。

（Aさん）ベッドで誰にも邪魔されずに寝たいと思って、ベッドを貼りました。それから、緑を貼ったのは、緑の中で癒されたいなと思って。それから、友達とお茶を飲みに行きたくて、ケーキや飲み物をいっぱいにしました。20 歳に戻りたいとも思って、丁度、20 歳の誕生日ケーキがあったから、貼りました。

（Oさん）ひたすら食べたいから、食べ物ばかり貼ってみました。こんなふうにおしゃれに作れたらいいなと思って。あと、買い物には行くけれど、子どもがいると雑貨店に行きたくても、怖くていけないから、雑貨が欲しいなと思って雑貨がよく目に入りました。買いたいというよりも、ただ見て回りたいだけだけど。今行っても、「こら」とか「触るな」とか言いそうで、怖い。（図 1）

図 1

（Kさん）音のある生活をしたいなと思って、音符を貼りました。別に両親とも音楽はやらないけれど・・。常に音楽は、流しているけれど。それから、今年は、プールしか入れなかったから、海にも行ってみたいし、浴衣も着れなかったから着たいし、花火もできなかった。やりたかったことを貼ってみました。

（mさん）旅行に行きたいなと思って。丁度、北海道に行って、おいしいもの食べたいなと思っていて、ホテルや旅館に出てくるような料理があったから、こういうものがいいと思って。それから、ディズニーランドが30周年の間に行ってみたいから、3月までに行けたらいいなと思って。ただ、現実離れしたいのかも••。ディズニーランドが無理なら、せめて公園でお弁当でもいいから、とにかくどこか行きたい。他には、将来犬を飼いたいなと思って。（図2）

図2

（Nさん）小笠原諸島に行ってみたいから、貼ってみた。
その他の母親：どうしてそこなの？
そこに行けば何もしなくていいから、解放されたいのかな。他にも、私が行きたいお料理屋さんがあって、一人でカウンターに座って、おいしいもの食べたいなと思って。とにかく癒されたい。子どものいない空間がいいなと。ゆっくり、ちょっとのものを、高級なものとか食べたいから、この高そうなお肉の写真にしました。（図3）

図3

（Hさん）花のドレスを着てみたいと思って。きれいな服を着て、お酒を飲んで・・。かわいいものとか好きで、癒されたくて。大人の時間が欲しいなと思って。

（Mさん）ずっと子どもが泣き続けており、母親も落ちついて座ることができない。あとから様子を聞いてみると「朝からずっと泣いていて、一時も離れずに泣いていて、今までとは全く違う様子で。私が何も言わなくても、子どもはいろいろわかるみたいで。」母親は、諦めたように子どもをなだめ、その泣く理由も心当たりがある様子であった。

（以下は、この日の活動後、母親が記入した感想の抜粋である。）

- いつも主人に「今やりたいことは何？」と聞かれても答えられなかったのですが、今日のコラージュで自分の気持ちが良くわかりました①。
- 案外楽しく作業できました。時々やってみたいです。
- 今日は気分がリフレッシュした気がします。雑誌を見る機会は、最近なくて、きれいなものや色を見るだけで、とても癒されました②。
- 今日は、自分の行きたいところを切り取って、貼り付けることで、なんとな～く日頃のストレスが無くなったような気がしました②。それと同時により一層、希望を叶えたいと強

く思いました①。早く叶うといいなあ～。

- ゆっくり雑誌を読んでいないことに、気がつきました。久しぶりにパラパラとめくってみたら、いろいろな欲が出てきました①。おいしいものが食べたいし、きれいな服も買いたいし、旅行にも行きたくなりました。時間ができたら、叶えたいです。
- 今日は、コラージュで癒されました。好きなものを切り貼りするだけでも、楽しかったので、家でもやってみたいです②。ありがとうございました。

【考察】

コラージュの作業は短時間であったが、母親らは熱中し積極的に取り組んでいた。出来上がったものは、まとまりのない雑多な印象である。しかし、母親らが、コラージュの内容を個々に語るうちに、現在の興味や関心がさまざまに映し出されていることが分かった。これは、「母親」という現状から少し離れ、母親の中にある「私」の内面を率直に表現していたといえる。また、それぞれの母親が、自身の考えを他者に伝えることに躊躇することよりも、聞いて欲しいという意欲さえ見られた。合わせて、他者の話を聞く母親らの姿からは、他者に対する関心を持ち始めていることも見て取れた。これは、母親同士の関係性を作る以前に、母親自身が話したくなるような仕掛けや条件を揃えれば、初めて出会う他者にも自己を表現でき、ひいては他者との関係も自然と築くことが可能であることが分かった。母親らの姿からは、他者の考えを聞く行為により、他者を知ろうとした瞬間であり、「母親と他者」とがつながるきっかけとなる場面であった。

内容としては、行きたい場所、食べたいもの、着てみたい服など、一見いつでも実現可能な行為ばかりであった。このことから子育て中の母親においては、その実現可能な行為さえも実現できないことに対する負担感を持っていることが理解できた。出産以前には簡単にできたことも、子どもの存在により実現が困難になった生活の変化は、多くの母親に負担感を与えているといえる。また、「一人の時間（大人の時間）が欲しい」や「ゆっくり寝たい」といった基本的な欲求が満たされない点について語られたことは、一人の「私」になる時間を求めていることも読み取れる。今回のように雑誌から好きなものを自由に選ぶ行為は、直接的に実現するものではないことを母親は承知した上で、単に空想の世界へ没頭したいわけではなく、子どもや子育てから一時離れ、母親自身が持つ考えや思いを改めて振り返る場にしたいと考えた。これは、母親が、自己を振り返ることで、内面にある思いを明確にし、自己を知る機会になったと考える。つまり、「母親と母親自身」をつなぐ場になっている。

「子育て広場」終了後の母親の感想では、それぞれの母親がこの日の広場の内容を振り返っている。①のように「今日のコラージュで自分の気持ちが良くわかりました」「より一層、希望を叶えたいと強く思いました」とあるように、母親が、自身の思いについて改めて気づき明確にしていく心情の変化が見られる。これは、子育ての中で起こる負担感や不安感あるいは生活の雑多な出来事といったものが、複雑に混ざり合った状態から、改めて考える場となった瞬間である。そして、母親の中にある「私」について考える場面となっている。また②では、「きれいなものや色を見るだけで、とても癒されました」「自分の行きたいところを切り取って、貼り付けることで、なんとな～く日頃のストレスが無くなったような気がしました」とあるように、自身の思いが満たされたことに気付いた母親らの感想であった。短時間であっても、子育て中の母親の内面に触れた活動であるならば、効果的に自己の思いを明確にし、思いを転換していく作用があると分かった。

4．3．母親の話し合い③

テーマ「なかなか誰にも言われないけれど、相手から言われたいこと。言ってあげたいのに、相手になかなか言えないこと。～ペープサートに言葉を入れて～」

子育て中の母親らにとって、身近な人との関係がどのような状態であるのかを整理することは、時間的にも心理的にも余裕がない状態である。そこで、母親が自身を取り巻く人との関係を捉えることにより、現状を考えるきっかけとするためにこのテーマとした。今回は、話し合いの仕掛けとして、吹き出しが両面に書かれたペープサートを用意し、身近な人との関係を明確にする作業とした。内容としては、身近な人に日常では言われないが「言われたいと思っていること」は何か、身近な人に対して言うべきであるが日常ではなかなか言えず「言ってあげたいと思っていること」は何かを考え、言葉をペープサートに書き入れる。母親にとって身近な人を取り上げることにより、母親と身近な人との関係を考える場となるため、相手は自由に選択することとした。

（Nさん）「一生守ってあげる」

その他の母親：うわぁ～

違うの、旦那さんではなくて、この子に言ってほしいの（抱いた息子を指して）。「長生きしてね」夫に言ってあげたい。夫とは、前から交換日記をしているから、何でも言えているから。

Oさん：交換日記？どうして？

初めは、私がお菓子とかを仕事から帰ってきたときに食べるように、置いておくところへメモを書いていたの。それを旦那さんが、ありがとうってメモするようになって、律儀にメモを取っておくから、面倒だからノートにしようということになって、なんだか自然に・・・。日記を書くようになって、良いところを探すようになったかな。書くことを探すっていうか、考えられる脳になったかな。

（Kさん）1歳半になって、昨日できなかったことが、できるようになったことを、自分がしっかりと育ててくれているからだと褒めてほしいし、褒めてくれることもある。「こんな刺激をくれてありがとう」と子どもに言いたい。子育ては大変なこともあるけれど、子育ては刺激的なことがいっぱいだから、子どもにこんな刺激をくれてありがとうと言いたい。

（Oさん）「また行こうね」と言われるのが、とても嬉しい。子どもが寝るときになって、その日にあったことを思い出して、また行こうねと言ってくれる。報われた感じがして、また行こうと思うし、もっと言ってもらいたいと思う。

夫や義母に感謝していることは、子育ての方針を尊重してくれることが、ありがたいと思う。その代わり、手伝ってはくれないけれど、かえって自分の考えたことを尊重してくれるので、やりやすい。

（nさん）「お弁当作ってくれて、ありがとう」と夫からポロッと言ってもらったことがあって、嬉しかった。一度も言ってもらったことがなくて、作って当たり前な感じでいるから、急に言われて「えっ！」と思って、何かあるのかなとも思ったり。また言って欲しいけれど。

Nさん：やらされている感は私もあるけれど、心と行動は別かなって思っていて。

そう思っても、他のときに私のほうから、ありがとうとか優しい言葉を言ったりメモしたりしている。ありがとうって言ってあげる人がいることは、自分も幸せなんだと思う。

ああ・・そういうことも考えなかった。ちょっとやってみようかな。

（Mさん）「家事を頑張ってくれて、ありがとう」と、夫に言ってもらいたい。

「愛情たっぷり注いでくれて育ててくれて、ありがとう。子育ての大変さが分かりました。」と両親に言いたい。この間、夫と実家から帰る途中の車の中で話したけれど、子どもを育ててみて、初めて親がこんな風に思って育てていたんだなと思って。今になって、ありがたいと思ったし、改まって言うことはないけれど、言いたいなと思って。

Nさん：うちでは、誕生日にビデオレターを作って、渡したことがあるけれど。改まって言うのは、なかなかいえないけれど、誕生日とかは丁度いい機会で、言いやすかったかな。

（Yさん）「助かっています。感謝」と、夫と母に言いたい。夫は、平日に私が子育てをしているので、土日の計画を全部決めてくれている。とても助かっているし、感謝しているから。

「ありがとう。お疲れ様。おいしいよ」と言って欲しい。結婚した当初は、よく言ってくれたのに、今は全然言ってくれないから、何度でも言って欲しい。

【考察】

母親らの話し合いの状態は、初回に見られたような話し合いに集中ができず不安定な空間から、自身の思いを詳細に語る態度へ変化している。また、他者の思いを注意深く聞く姿が見られ、これまでの一方向的な語りではなく、下線部分にあるように、明らかに他者の話について疑問を持ち、母親同士が応答しあう様子へ変化した。母親たちの間には、子育てに関する深い問題を投げかける場面はないが、テーマを共に考え共感する過程で、「より理解したい」あるいは「思いを共有したい」といった意識が深まったと考えられる。さらに、他者に対する疑問を投げかけ、これに付随する自身の思いも伝えるようになり、母親らが互いに受け止め合いながらも自身を表現する場に変化している。

またテーマに対する回答には、母親らの身近な人との関係性が映し出されていた。「言ってあげたい言葉」には、夫や祖父母・子どもに対する感謝が多く、子育てや生活に関する肯定感が表れている。「言われたい言葉」には、夫からの感謝の言葉を望んでいる傾向が強く、家事や子育てにおいて認められる感覚が不足していることがわかる。このことからも子育てに対する負担感や被害的認知があることも確かである。つまり、家事や子育てにおいて母親は、負担感や不安感がある場合であっても、同じように家事や子育てにおいて喜びや充実感といった肯定感を得ていることも理解できる。

この作業からは、身近な人との関係性を改めて見つめ直す場面となり、日常生活で無意識的であった点を明確にし、母親自身によってどのように関係を作るべきかを導き出す作業となった。母親は、喜びや感謝など肯定的な思いがあることに気付いた上で、身近な人との関係性を見直すとともに、それら関係性により生活や子育てに対する心情が変化する可能性があることも気付き始めている。

4．4．母親の話し合い④

テーマ 「この一年で変わったことは何ですか？」

継続して開催してきた「子育て広場」は、この回で最後の話し合いとなった。そこで、一年を通して母親を取り巻く環境を振り返り、母親自身がどのような変化があったのかを確認する場となることを想定し、このテーマとした。これまでの活動により、母親同士の関係性が作られてきた中で、それぞれの母親も自己について語るように変化してきたことから、仕掛けとなる作業は取り入れず、自由に話し合う場とした。また、テーマについても、母親が感じた変化をさまざまな視点から語れることを願い、「子ども」「子育て」に関わる具体的な制限は付けずに自由な話し合いとした。

（Kさん）今、1歳9ヶ月で、1歳になるまでは手をかけてばかりだったけれど、最近はいろいろできるようになって・・。ある本でアンケートがあって、「お子さんとどう関わっていますか？」というもので、積極的にかかわるのが80%で一番多かった。でも、専門家によると、その本の中では、子どもには意思があって、表した時に応えるように母親はしたほうが子どもにはいいということだったの。私も丁度気が抜けるからいいかなと思って、言ってくるまで、あまり手をかけ過ぎないようにしようと思って①それが変わったかな。

（Oさん）あんまり私自身、子どもには大人と関わるのと同じようにしていて、あまり関わらないかな。他のお母さんが、すごく子どもに声をかけていて、「私って冷たい」って思ったこともある。でも私はできないなと思って。①特に、園に行った時、保育士さんがすごくて、目の高さをいつも合わせていて、声が高くて、普通の感じとは違って、ゆっくり子どもに話しかけていて、こんなにしないといけないの？って思った。

（Kさん）私の場合、両親も遠くて、わけが分からないと、やっぱり本とか見るしかなくて、で、よく見ていたかな。今は、トイレトレーニングが気になっているんだけど。いつ始めるんだろう？どうするんだろう？って。

Uさん：大丈夫だよ。うちの下の子なんて、2歳過ぎたけれど、まだだよ。

（Aさん）私・・お酒が好きで、強いんですけど、上の子ができてから、4歳なんですけど、下の子も産まれて、下の子が先週やっと断乳して、やっと飲めるって感じで。やっと、きたーって感じで。②

その他の母親：すごい子どもができたことで変わりますよね。

Aさん:そう、子どもを産むことで、できなくなることって多いから••。まずは、おいしい梅酒を、大きい氷を入れて飲みたいなと思って。

Kさん：私も始めは梅酒からだった。梅酒おいしいよね。お酒が飲めるって、何がいいのかな。

Aさん：大人と話せる楽しさが、戻せるかな。飲み会にも行きたいし。飲めないと行けないわけじゃないけれど、飲めないって思うだけでストレスになるから、行けなかったし、そういう場面にも出なかったから。

（Oさん）例えば、風呂上りに、前は拭いてあげたり服を着せたりしたけれど、今は出しておけば、自分でやっていて、人間になったなと思った。トイレと着替えは、でき

るようになったから、全然変わった気がする。①
その他の母親：人間になったなって時、あるよね。
N さん：私も、大人みたいなことを言うようになった時、ああ変わったなって。お姉ちゃん（3 歳）が、「いいよ、私がやっといてあげるから、横になってな。」とか。主人が言っている真似なんですけど、なんだか嬉しくて。
（N さん）下の子が産まれて、いろいろ変わったんですけど、「まだハイハイでいいよ～」って、下の子には思っちゃう。③
A さん：私も前はすごく悩んでいたけれど、今は「まあいいか」ってすぐに思っちゃう。③
H さん：私も、泣いていても、前は「何で泣くんだろう？ミルクもあげたし、オムツも替えたし、何でだろう？」って悩んで、でも今は、下の子の泣き声がかわいくて、「ああ泣いてる～」って感じで。③
（H さん）丁度一年前、インフルエンザに主人がかかって、会社を休んでいなくてはならなくて、でも元気になってどこへも行けないから、家を見ることになって、結果一年後に引っ越していて、引越しから 10 日もたたないうちに産まれたから、もう家の中が片付かなくて。予定日よりも早く産まれたから。
N さん：私も一年前は、下の子がいたら大変なのかなと思っていたら、思っていたよりも楽で・・。ずっと行きたかったカフェにも、3 人で行けて。②
その他の母親：え～すごい！
（N さん）子育ても、下の子の離乳食は、上の子のときと違って、「素材の味って何だっけ？」って思いながら、「まあこんなかな」って。変わったなと思う。
A さん：二人目だから楽なのかな。私も下の子、楽だ。上の子は、いつまでたっても初めてで、問題が一つ終わると次の新しい悩みが出てきて、上の子は分からない。
U さん：やっぱり、流れが分かっているから、きっとできると思えるよね。
（H さん）子どもができることが多くなって変わったし、子どもが私でなくても、お父さんであればできることもあって、変わった。一年前は、自分が知っている人もいなくて、でも外に出て、他のお母さんと話すようになって、自分が気がつかないことも教えてもらうようになって。それまで、うちの子、口が達者だから、家にいるときは、私のほうがヒステリックになっていたし、「もう私ダメかも」って思っていた。そんな時、たまたま公園に行ったときに、会ったママに話して、そうしたら、ここを教えてもらって、ここに来るようになって、いっぱい話して。本当によかった。①
（U さん）やっと、下の子がしゃべるようになってきたことで、検診などでもそれまで気になっていて、保健士さんにも気にしてもらっていたけれど。にいに（兄）の言葉だけど、真似するようになって、少しずつ分かるようになって、変わってきた。私も子どもが変わって、通じるようになって、変わってきた。①

【考察】

子育て広場の最終回となったこの話し合いには、集まった母親らがともに同じ時間を共有することへの意欲が見られた。それは、母親らの表情は穏やかでありながら即座に席に着き、

語り合うためのゆったりとした環境が一人ひとりの母親に整えられていることが見受けられた点である。また、母親らの語る内容は具体的であり、自身の思いを詳細に伝えようとするために、一人の母親の語る時間が増えていることは明らかな違いであった。さらに語る母親に対して、他の母親らが話を展開していることから、母親同士のつながりが作られてきたことを読み解くことができる。今回のテーマは、この一年の自己を振り返るものであったが、話題提供としての「きっかけ」だけであり、母親らが「話す」こと「聞く」ことに集中し、他者の話を自らのこととして聞き応答する状況へ変化していた。

それら話し合いの内容はさまざまであるが、母親の思いの変化をいくつかに分類することができる。①の「言ってくるまで、あまり手をかけ過ぎないようにしようと思って」「ここに来るようになって、いっぱい話して。本当によかった。」とあるように、母親が他者に話すことで、学ぶことが多かったと実感したり、子どもの成長を通して、母親自身が子育てや子どもへのかかわり方が変化したと捉えたものである。それは、育児書を参考にする母親や、他者あるいは保育者に影響を受けている母親もいるが、その後母親自身が子どもとのかかわり方を考えた結果、母親が判断し、子どもとのかかわり方を変化させている。また、②のように子どもの成長を通して、母親が自己を見つめ、子育てを自身の生活スタイルに変えたと捉えたものである。これは、子どもの成長に伴い、子育てに関わる負担感や不安感・被害的認知を増幅するのではなく、母親自身の生活を取り戻そうとしている姿がわかる。③の「前は『何で泣くんだろう？ミルクもあげたし、オムツも替えたし、何でだろう？』って悩んで、でも今は、下の子の泣き声がかわいくて、『ああ泣いてる～』って感じで。」とあるように、第二子の存在により、これまでの子どもや子育てに対して感じていたものとは異なり、自然と子育ては変化していくものと捉えている母親もいる。これらの母親らによる自己分析は、この一年の変化に対する捉え方はさまざまであったが、子どもの成長や自己の変化を見つめたことにより、母親自身が子育ての方向を自ら考え判断し、子どもや自己を理解しようと試みていることが分かる。

４．５．母親同士の話し合いのまとめ

母親同士の話し合いは、三つの点において明らかになった。第一には、テーマの設定が、母親の話し合いの展開を左右した点である。このテーマは、話し合いの「きっかけ」として提供したものであるが、その一方で「子どもを見つめること」「自己を見つめること」において、大きく母親の思いを揺り動かす作用となった。さらに、話し合いの中でさまざまな母親らの思いを聞くことにより、「他者を見つめる」場面となることを想定している。これは、実際の子どもの成長や動きを見つめることだけが、子ども理解につながるのではないと考えられるからである。つまり、テーマを通して母親は、多用な視点から子どもや子育てについて考えることになり、母親自身の気付きや思いが明確となり、子ども理解を促す可能性を想定したのである。

話し合い①のテーマ「最近出かけたところ・これから行きたいところ」では、子どもや家族との生活や行動を改めて見直すことにより、現在の子どもを見つめることに焦点を当て考えることをねらいとした。しかし第一回目という緊張状態であったため、話し合いとしては、テーマの意図に添った活発なものとはいえなかった。そのため、母親同士が応答的に話し合うことはなく、他者の意見を聞くにとどまる形となった。また、話し合い①のもう一つのテー

マである「子どもの頃に行ったところ」や話し合い②の「好きなものや興味のあるもの」では、自己を見つめることに焦点を当てて考える場としている。これは母親が、漠然と考えや思いを語ることよりも具体例を挙げることにより、改めて自己を見つめる場面としたものである。特に、母親の子ども期を振り返ることや母親自身の日常を振り返ることは、改めて考えなければ気付かなかった発見があり、母親らの話し合いの中から母親が自己を理解していく過程が見られたテーマである。特に、「ゆっくり寝たい」「こんなものを食べたい」など基本的な欲求が表現されていた点は興味深く、実現可能なものでありながら満たされていない母親の現状も浮き彫りになった。また、話し合い③のテーマである「相手から言われたいこと・相手になかなか言えないこと」では、母親と子ども・母親と身近な人との関係性を、母親が見つめた場面である。母親らは、日常にある細やかな思いを丁寧に伝え、あるいは丁寧に他者の話を聞こうとする姿が見られ、徐々に心を開いていく変化があり、母親同士の関係性が作られていく過程が見られた。さらに母親らは、子どもや家族について考えるとともに、自己の行動を通して自己の思いを明確にしていた。話し合い④の「この一年で変わったこと」においても、子どもを取り巻く家族や自己について考える場面となった。子どもについて考えていくことは、おのずと家族や自己を見つめることになり、自己を見つめていくことは、ひいては子ども理解に関連していることを母親の話し合いの内容から読み解くことができた。

第二に、話し合いの補助的な「仕掛け」として、テーマに沿った作業を組み入れた点は、話す準備段階として母親らの思いをまとめる作用を起こし、母親同士の和やかな環境構成にも生かされたと考えられる。作業は、雑誌を活用したコラージュやペープサート・書などさまざまであり、そのテーマごとに変化を加えていることから、母親らが話し合いに対して関心や期待を生み出す効果があったともいえる。また、このさまざまな作業は、母親自身の思いをまとめ、語るための手助けとなり、他者の話を聞き理解するための手助けともなっていた。話し合いの内容に、この「仕掛け」となる作業が、効果的に母親同士の関係性を構築し、また母親の子ども理解にもつながる作用の一つとなったことが明らかとなった。

第三に、母親の話し合いは、「話す」あるいは「聞く」行為により成立しているが、話し合いを継続的に重ねたことにより、「話す」「聞く」行為に変化が見られたことである。それは、テーマや作業によって得られたものだけではなく、この「話す」あるいは「聞く」といった単純な行為が、母親同士の関係性を構築し、母親同士が思いを共有しようとする意欲が生まれたと考えられる。話し合いの内容は、徐々に具体的で詳細に語られるようになり、母親同士が応答的に話を展開するよう変化した。これは、子どもとの直接的なかかわりが多い生活から、大人としての関係や会話を要求していることに対応していると考えられる。また、話し合うことで母親が子どもから距離をおくことになり、子どもを客観的に見つめ、母親自身が自己を見つめ、同じ子育てをする母親との交流により他者を見つめることができた。これらは、相互に関連しあうことで効果が生まれており、「話す」「聞く」行為の重要な点であったと考えられる。

5．総合考察と今後の課題

子育て中である母親にとって、「母親と子ども」「母親と他者」「母親と母親自身」をつなぐ支援が必要と考え、これに重点をおいた支援活動を行った。母親同士の話し合いの場では、「子どもを見つめる」「自己を見つめる」ことに配慮したテーマを設定し、その結果、子ども

や子育てについて改めて考える場となり、母親の気付きや思いが明確となっていった。さらに、話し合いにおいて他者の思いを聞くことが、「他者を見つめる」場面となり、自身の思いと他者を重ね合わせ比較し、これが自身と子どもとのかかわりについても考える場となり、子ども理解を深める要素となった。また、話し合いに補助的な作業を組み入れた点は、話す前の準備段階として母親らの思いをまとめる作用を起こした。この話し合いの仕掛けとなる作業が、効果的に母親同士の関係性を構築し、また母親の子ども理解にもつながる作用の一つとなり、効果が捉えられた。話し合いの内容は、回を重ねることで徐々に具体的で詳細に語られるようになり、母親同士が応答的に話を展開するよう変化したことからも、話し合うことで母親が子どもを客観的に見つめ、母親自身が自己を見つめ、同じ子育てをする母親との交流により他者を見つめることができた。すなわち、「話す」「聞く」行為には、子どもあるいは他者・自己を見つめ理解し、「母親と子ども」「母親と他者」「母親と母親自身」をつなぐための重要な方法であることが明らかになった。

また、これら「母親と子ども」「母親と他者」「母親と母親自身」をつなぐ作用は、母親が「子育て広場」終了後に書かれた感想からも、読み取ることができた。これら計 10 回の感想には、情報収集や気分転換としての利点だけではなく、子ども・自己・他者を見つめる場となっていた。

これは、母親が自己と向き合い、母親が母親として育つための支援となるために、子育てにおける不安感や負担感を軽減し、肯定感を得ていることが実感できるように支える活動内容が必要であり、さらにこれが可能となるスタッフの支援力が重要である。こうした支援により母親が、これまでの経験や生活状態を丁寧に分析し、自己と向き合うことができたならば、自身にとって必要なことは何かを適切に判断でき、子どもや子育てに関する理解が深まるのである。子どもにおける理解が実感できたとき、さらに母親は子育てに対する安心感や肯定感を得られるものと考えられる。

今後の子育て支援活動には、多くの課題が残されている。それは、時代の変化により、子育て環境は日々変化し、子どもを育てる者の環境も変化していくと考えられるからである。現在の母親においては、さまざまな支援活動を選択できる環境が整い、母親らはさまざまな情報を得ているが、情報の氾濫によって更に、混乱している母親もいる。そのため子どもや母親に対するさまざまな支援を整えているが、子ども理解へつなぐことのできない母親がいることを考慮し、改めて支援内容を見直すことが重要といえる。母親は、子どもと直接的に関わっていれば理解できるものとは限らず、子どもを見つめる場が必要であり、母親が母親として育つ場が子ども理解につながることに重点を置き、子育て支援の機能に含むことが必要と考えられる。さらに、今後、母親が子ども理解を深めるためには、どのような取り組みを必要としているか、検討を進めるべきであると考えている。

二点目としては、子育て支援の場が、子育て中の母親一人ひとりにとって身近な場所、あるいは身近な存在となることをさらに検討する必要があると考える。母親同士の話し合いで語った母親のように、「私のほうがヒステリックになっていたし、『もう私ダメかも』って思って」とあったが、これは特殊なケースではなく、子育て中の母親らには共有できる心情である。そのため、さまざまな子育て支援活動の場は広がっているが、生活の身近な地域の中にこそ、子育て支援の場が必要とされていると思われる。こうした子育てにおいて感じる社会との距離感や孤立感がある一方で、子育てにおける肯定感を得ていることも事実である。そ

のために、子育て中の母親に対して身近な地域にこそ、母親同士をつなげる支援の場を広げることが必要であると考え、今後の課題としてさらに検討したい。

引用文献・参考文献

1）落合恵美子「21 世紀家族へ」有斐閣 1994.

2）牧野カツコ「乳幼児を持つ母親の生活と〈育児不安〉」家庭教育研究所紀要 3　34-56 1982.

3）岩田美香「育児期の母親の不安とソーシャル・ネットワーク」北海道大学教育学部紀要第 68 号 191-233 1995.

4）大日向雅美「母性愛神話とのたたかい」草土文化　2002.

5）鯨岡峻「〈育てられる者〉から〈育てる者〉へ　関係発達の視点から」日本放送出版協会. 2002.

6）荒牧美佐子・無藤隆「育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対照に」発達心理学研究第 19 巻第 2 号 87-97　2008.

7）中谷奈美子・中谷素之「母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響」発達心理学研究第 17 巻第 2 号 148-158 2006.

8）大豆生田啓友「支えあい、育ち合いの子育て支援」関東学院大学 127-137 2006.

・岩田美香「縦断調査からみた『育児不安』の性格」北海道大学教育学部紀要第 74 号 2001.

・朴信永「子育てにおける認知の改善が養育態度・育児ストレスに及ぼす効果」保育学研究第 44 巻第 2 号 2006.

・安藤智子・荒牧美佐子・岩藤裕美・丹羽さがの・砂上史子・堀越紀香「幼稚園児の母親の育児感情と抑うつ　―子育て支援利用との関係―」保育学研究第 46 巻第 2 号 2008.

・幸順子・浅野敬子「母親の育児意識に関する研究―子育て支援親子教室参加者の育児意識構造―」名古屋女子大学紀要 56　199-210 2010.

・横川和章・小田和子「子育てサークルへの参加による子育て意識の変化」兵庫教育大学研究紀要 第 40 巻 19-27 2012.